

Seas Under Ⅱ 灰色の海底」と「The Serpent's Coil Ⅱ 海へびのとぐろ」を書く調査のために、モーワットはニューファンドランドのバートという、外部とは全く隔絶した人口わずか九百人の小さな漁村に住んだ。「The Whale for the Killing Ⅱ そのクジラを殺せ」は、バートの近くで起こった事件に基いている。一九六七年のある日、一頭のひれクジラが礁湖に迷い込んででられなくなった。何人かの地元の人たちは、それに何発もの銃弾を打ち込んで面白がった。モーワットは怒って、海外の報道機関にその事件を伝えた。クジラは傷と飢餓が原因で死んでしまった。モーワットの本に基いて、映画が制作中である。

モーワットの生活自体の中からも、いくつかの作品が生まれた。彼が子供の頃に飼っていた動物のうち、ウイルとウイ



ープスという二ひきのフクロウは「Owl's in the Family Ⅱ 「ぼくとくらしたフクロウたち」で取り上げられたし、犬のマットは「The Dog Who Wouldn't Be Ⅱ 「犬になりたく



なかつた犬」の主人公だ。水もれのスクリュー「幸福な冒険号」のことは、「The Boat Who Wouldn't Float Ⅱ 浮いてくれないボート」に面白おかし

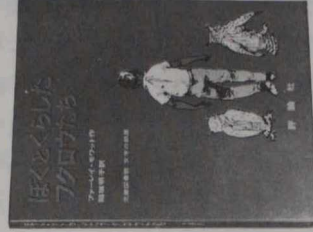
く書かれた。この本で、モーワットは一九七〇年にステファン・リーコック・ユーマア賞をもらっている。

その他の作品は、過去のできごとを記録したものである。初期の作品「The Fighting Ⅱ 連隊」は第二次大戦における彼自身の部隊について書いたもの。カナダの東岸で起きたレイセスター号とフアウンダーション号という二隻の海洋貨物船の沈没事件のことは、「海へびのとぐろ」に書かれている。「Siberia Ⅱ 邦訳甦える大地」は、一九七〇年に、モーワットが一度にわたってシベリアへ旅した後で書いたもので、北方地域を開発、植民しようとするソ連の努力を扱っている。

モーワットの最近の作品は、再びカナダの北極地域をテーマにしている。一九七五年にでた「The Snow Walker Ⅱ 氷上に住む人々」は、エスキモーに関する十一の話を集めたもの。エスキモーの絶え間ない厳しい環境との闘いは、きわめて感動的な物語になっている。隔絶された家族が知恵と勇気によって大吹雪と凍えるような寒さ、それに食糧の欠乏をとるように乗り越えたかを、エスキモーはこの本の中で語っている。一九七六年に出版された「Canada North Now Ⅱ カナダ北方の現況」は、以前でた本を改訂したもので、先史時代から現在までのエスキモーの歴史をたどっているほか、北方開発によつて北極地域の環境と先住民族の生活様式がどんなに被害をこうむってきたかを、熱っぽく書いている。

(モーワットの作品のうち、次のようなものが日本語に翻訳されている。「犬になりたくなかつた犬」、角 邦雄訳、

文芸春秋社、一九七五年、「ぼくと暮らしたフクロウたち」、稲垣明子訳、評論社、一九七二年、「バイキング墓の宝」、久米稯訳、評論社、一九七六年、「甦える大地」、角 邦雄訳、読売新聞社、一九七四年、「オオカミよ、なげくな」(「Never Cry Wolf」)、小原秀雄・根津真幸訳、紀伊国屋書店、一九七七年、「ジャミーとアワジンのバレンランド脱出作戦」(「Lost in the Barrens」)、久米稯訳、評論社、一九七四年)。



子ども向けの本から

●ジャン・リットル「Listen for the Singing Ⅱ ほら聞えるでしょう、歌声が」(Dutton and Clarke-Irwin 発行、一九七七年)。

目が不自由なアンナとドイツからカナダに移住してきた彼女の家族の物語。ときは第二次世界大戦が始まった一九三九年。(昨年度のカナダ文化振興会児童文学賞受賞)

●アンリエット・マジヨール「L'Évangile en papier Ⅱ 楽しい聖書」(Fides 発行、一九七七年)

新訳聖書から子供向けに書いた話を集めたもので、クロード・ラフオーチンによる三面体の切抜き絵をカラー

写真にしてイラストに用いている。(ラフオーチン氏は、この作品により、七七年度カナダ文化振興会児童文学賞のイラスト賞を受賞している)。

●デニス・ウル「Lune de Neige Ⅱ 雪で作った月」(Guy Mabeux 発行、一九七七年)

四人の子供が犬、猫、猿とクリスマスに月へ行き、民話や物語に登場するいろいろな人物と会うという劇。(同児童文学賞受賞)

●モアカイ・リックラー「Jacob Two-Two Meets the Hooded Fang Ⅱ ヤコブちゃんちゃんのぼうけん」(McClelland and Stewart 発行、一九七五年)

ヤコブは五人兄弟の末っ子。何か言っても一回目は誰も聞いてくれないので、いつも同じことを二回繰り返して言う。彼の不満をなだめようと、初めてお彼れに行くことを許される。ところが八百屋さんが威圧的だったので、公園に逃げてしまう。そこで大人に失礼なことをした罪で裁判にかけられ、電話もかけられない、道も横断できない、自転車も乗れない、もちろんお彼れにも行けない子供の刑務所に、一年と二カ月と二時間入れられることになる。そこから兄と姉らしい二人の子供に助けられる。

●ミュキ・タノベ、モーリス・サビナック協力「Québec je t'aime I Love you Ⅱ 私が愛するケベック」(Tundra Books 発行、一九七六年)

ケベックの風物を温かく、また楽しい絵と文章で紹介した、ケベックへの「ラブ・レター」。